

生きる力を育てる幼児教育 (宗教的情操教育の実践から学ぶ)

Infant education to grow up child zest for living

(Learning from the practice of religious sentiment education)

吉田季代

Kiyo Yoshida

要 約

幼児期は人間形成において重要な時期である。豊かな感情、あたたかい心が一番育つのは幼児期であると言われる。生物的ヒトではなく、豊かな心を持った人間として育つためには、この幼児期に「いのち」の尊さ、善悪の判断を育むことが大切である。人の命はもちろんのこと、小さな虫や草木、身の回りにあるすべての物に「いのち」があることに気づき、思いやる気持ちをもって、それぞれの命を大切にし、やって良いことと悪いことの判断を培うことこそ、幼児教育における「生きる力を育てる」ことであると考える。

今回、ぶっとく幼稚園で日常行っている宗教的情操教育の実践を顧み、それが子どもたちの「生きる力」の育ちや、命を大切に育ちに有効であることを再確認した。

1. 緒言

近年、凶悪な事件や「いじめ」、虐待など、悲しく胸がしめつけられるような出来事が、新聞紙上に毎日のように載っている。

もしかすると、幼児期にいっぱい泣いたり笑ったり、心をゆさぶる経験をせず、豊かな感性や感謝する心を育てることを忘れていたからではないだろうか。幼いころの毎日の生活の中で、思いやる気持ちをもって良いこと悪いことに気づき、「いのち」を大切にすることを忘れていたからではないだろうか。

今回、ぶっとく幼稚園で日常行っている宗教的情操教育の実践を顧み、それが子どもたちの「生きる力」の育ちや、「いのち」を大切にすることを育ちに有効かどうかを検証した。

2. 方法

下記のように、保育の実践を顧み、その結果としての事例を確認し、さらに客観的データを用いて検証を加えた。

① 宗教的情操教育の実践の確認

② 事例(卒園児の保護者の声)

③ 心理学研究の調査結果

3. 結果

ぶっとく幼稚園は、和歌山県有田市の中央に位置し、山や川、海など自然環境に恵まれている。昭和 28 年の創立当初から、仏教による宗教的情操教育を行っている。

その建学の精神は「おさなごに仏心を」とあり、生命を大切にし、感謝の心を忘れない、心も身体も健康な幼児を育てることを教育方針としている。

① 宗教的情操教育の実践の確認

ぶっとく幼稚園で行われている宗教的情操教育の実践を、1. 年間の宗教的情操教育、2. 日常の宗教的情操教育、3. 本堂へのおまいりによる情操教育、の3点で整理し確認した。

1. 年間の宗教的情操教育

5月＝花まつり

お釈迦さまの誕生のお祝い。

花御堂を作り誕生仏に甘茶をかける。白象を牽きながらパレードをする。

天上天下唯我独尊(天にも地にもわれひとり)の意味「自分という存在は唯一無二であり、1人ひとりが尊い存在であるという人間宣言である」ことを幼児にもわかるように話をする。

8月＝たままつり

お盆の行事の一環。

夕方から登園し、盆踊り・キャンドルサービス・夜店などのイベントがある。

その中で中心となるのは、本堂での園長からの話である。それは、自分の命は自分だけの命ではないから大切であることに気づくという重要な内容となっている。

12月＝成道会

お釈迦さまのお覚り(成道)のお祝い。

お釈迦さまの生涯について話を聞き、AVで視聴する。

皆が幸せになる方法を探し求めていたお釈迦さまが、ついに菩提樹の下で覚ったときの様子を聞き、それが仏教の始まりであることを知る。

2月＝涅槃会

お釈迦さまのお亡くなり(涅槃)。

お釈迦さまが沙羅双樹の下でお亡くなりになったときの様子を知る。

涅槃図の前で合掌・焼香し、涅槃図についての話を聞く。

自灯明法灯明(自らを灯とし、法を灯とする)の意味「他をあてにするのではなく、先ずは自らを確立せよ。それが難しい場合は真実の法を頼りとせよ」を、子どもにわかるように伝える。

2. 日常の宗教的情操教育

朝の挨拶 「み仏さま、おはようございます」

食事の前 「み仏さま、いただきます」

食事のあと 「み仏さま、ごちそうさま」

帰りの挨拶 「み仏さま、さようなら」

五つの誓い「1つ、私たちはみ仏さまの子どもです。

いのちを大切にします」

「2つ、私たちはみ仏さまの子どもです。

うそを言わないようにします」

「3つ、私たちはみ仏さまの子どもです。

ひとの物をほしがりません」

「4つ、私たちはみ仏さまの子どもです。

約束をまもります」

「5つ、私たちはみ仏さまの子どもです。

お友だちと仲良くします」

以上の挨拶や「五つの誓い」は、毎日の保育で行っている。

3. 本堂へのおまいりによる情操教育

週に2回(月曜日と金曜日)本堂におまいりする。

・讃仏歌を歌う

・み仏さまへ挨拶

・黙想(園長のことば)

目をしてみ仏さまの顔を思いうかべ、しずかに園長の話を聞く。

「み仏さまは、いつも皆のことは見てくれています。

お父さんが見ていなくても、お母さんが見ていなくても、先生が見ていなくても、み仏さまが見てくれています。

良いことをすれば、み仏さまが喜んでくれるし、

悪いことをすれば、み仏さまが悲しんでいます。

み仏さまは、いつも見てくれています」

・般若心経を拝読

・幼稚園教諭から仏教童話の素話を聞く

②事例

卒園児の保護者の声

(Aちゃん)

虫をとるのが好きで、とってカゴに入れて家でしばらくは満足そうです。でも、ふと気づくのか「虫にも命あるんよな。逃がしちゃろ。死んだらかわいそうやし、虫は外で飛んでるんが好きなんよ」と言って逃がしています。

(Bちゃん)

先日、家の前ですずめが死んでいました。「かわいそうに」と兄妹で土に埋めてやり、小さな花を供えて手

を合わせていました。仏壇のない我が家でも、心の中にみ仏さまがいるんだなあ実感しました。

(Cちゃん)

一人っ子のせいか、わがままに育ったところもありましたが、「み仏さまのおしえ」を守れないと、自分で「み仏さまがどこかで見てくれている」と言い、自分なりに反省していたようです。

今も透明なみ仏さまが自分のすぐそばで、いつもいるのだという気持ちを持ち続けているようです。

(Dちゃん)

小5の長男は、一時期とても反抗的になったことがありました。親のいたらんさが原因かと随分悩んだ日もあり、どうすれば良いのか本も読んでみました。

そして行き着いたところは、仏壇に「掌を合わせる」ことでした。最初は面倒がっていましたが、一緒に拝むところから始めました。

1年ほど経った今では、毎朝自分から御仏飯とお茶をあげてくれるようになりました。頂き物のお菓子なども「先にみ仏さまにあげやなアカン」と言い、小1の妹にも拝みに来るように催促しています。

掌を合わせるのはほんの一瞬ですが、続けることによって心がだんだんと落ち着いてきたように思います。これも3～5歳という大切な時期に幼稚園で育てていただいた土台があったからだだと思います。

③ 心理学研究の調査結果

和歌山大学教育学部心理学教室の森下正康教授による心理学研究の調査の結果¹⁴⁾を示す。子どもの育ち(とくに情緒面)に関して、両親ならびに保育者が子ども一人一人をどのように見ているのか、50数項目にわたるアンケート調査を行い、その結果をまとめたものである。

図中のA～Eは、和歌山県内の5つの幼稚園のデータを表している。その中でDが、ぶっとく幼稚園である。

図1の「自己抑制」とは、「つらくても我慢する」とか「今すぐでなくても待つことができる」とか「やりだしたら最後まで頑張ることができる」など、セルフコントロールできる心の育ちを表している。

ぶっとく幼稚園では、他の園にくらべて年少から年長にかけて育っている。

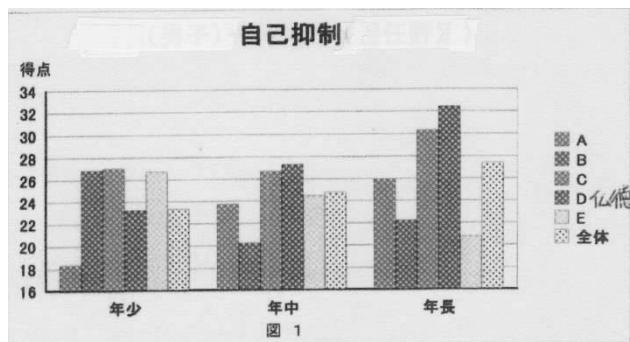


図2の「自己主張」とは、自己表現力とか積極性などと言いつけることができる。

年少から年長にかけて、若干下がっている。

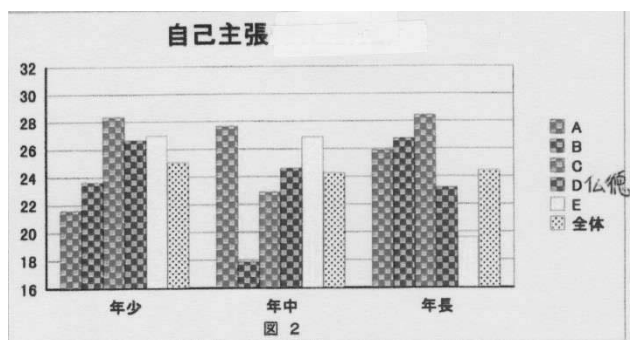


図3の「養護性」とは、優しさや思いやりの側面を表す。

年少から年長にかけて、順調に育っている。

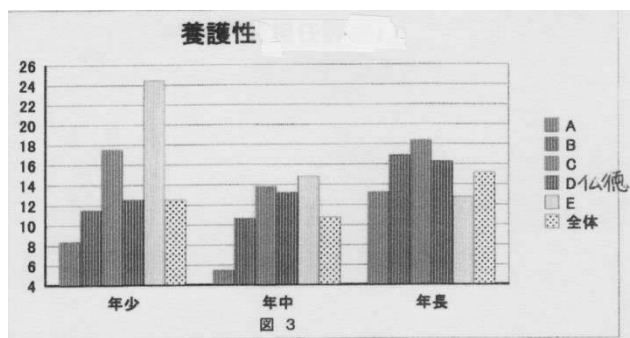
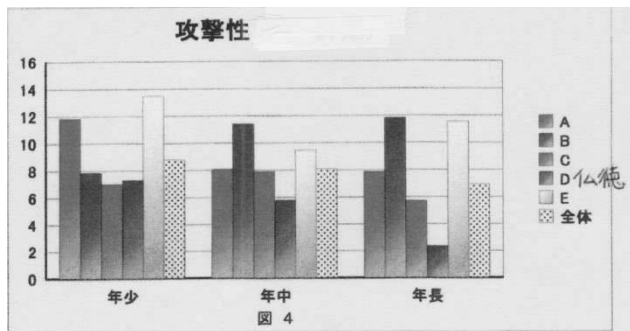


図4の「攻撃性」とは、乱暴で口より先に手が出るといった傾向を示す。

年少から年長にかけて、他の園にくらべて顕著な減少が見られる。



4. 考察

入園したての3歳児は、合掌ができないのはもちろん、「み仏さまってなに？」という感じであるが、3年間の園生活の中で環境を通して、それぞれに「み仏さま」を自分のものにしていく様子が見えてくる。

その園生活には、年間を通しての宗教的活動と日常生活の中の活動、そして週2回の本堂へのおまいりなどがあり、まさに長期的かつ短期的環境を通しての心の育みがなされている。

卒園児の保護者の声によると、幼稚園で育んだその宗教的情操は、卒園後も感性の底に残り、生涯にわたる人格形成の基礎となっていることがうかがえる。

幼稚園教育要領の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」にある「してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返る」ことの育ちには、この宗教的情操教育がより有効であると思われる。

同じく幼稚園教育要領「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」にある「身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚える」という姿も、卒園児の保護者の声の中に多く見られる。

それを客観的にとらえたデータが、和歌山大学心理学教室の森下正康教授による心理学研究の調査結果¹⁾から見ることができる。

このデータによると、ぶつとく幼稚園の特徴として、年齢とともに攻撃的な面が減少し養護性が育っていることが読み取れる。また自己主張が若干下がっていることは気になるが、もう一つの側面である自己抑制が育っていて、我慢する心の育ちは顕著である。

これらのことは、ぶつとく幼稚園の宗教的情操教育が子どもたちの「生きる力」の育ちや、「いのち」を大切にすることを示しているように思える。

5. 結論

幼児期は人間形成において重要な時期である。豊かな感情、あたたかい心が一番育つのは幼児期であると言われる。生物的ヒトではなく、豊かな心を持った人間として育つためには、この幼児期に「いのち」の尊さ、善悪の判断を育むことが大切である。人の命はもちろんのこと、小さな虫や草木、身の回りにあるすべての物に「いのち」があることに気づき、思いやる気持ちをもって、それぞれの命を大切に、やって良いことと悪いことの判断を培うことこそ、幼児教育における「生きる力を育てる」ことであると考えられる。

今回、ぶつとく幼稚園で日常行っている宗教的情操教育の実践を顧み、それが子どもたちの「生きる力」の育ちや、命を大切にすることを示していることを再確認した。

6. 参考文献

- 1) 森下正康 2000a 幼児期の自己制御機能の発達(1)—思いやり、攻撃性、親子関係との関連— 和歌山大学教育学部紀要(教育科学)、50、9—24.
- 2) 森下正康 2000b 幼児期の自己制御機能の発達(2)—親子関係と幼稚園での子どもの特徴— 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要、10、117—128.
- 3) 森下正康 2001 幼児期の自己制御機能の発達(3)—父親と母親の態度パターンが幼児にどのような影響を与えるか— 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要、11、87—100.
- 4) 森下正康 2002a 幼児期の自己制御機能の発達(4)—園と家庭における縦断的研究— 和歌山大学教育学部紀要(教育科学)、52、1—12.
- 5) 森下正康 2002b 幼児期の自己制御機能の発達(5)—親子関係が家庭と園での子どもの行動パターンにおよぼす影響— 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要、12、47—62.
- 6) 森下正康 2003 幼児期の自己制御機能の発達(6)—保育の特徴と子どもの行動特徴— 和歌山大学教育学部紀要(教育科学)、53、23—38.